



1. 南西から見たプレー火山。海岸のサンピエールは頂上から約7 kmの地点にある。山の左側の切り立った崖は Vincent ほか (1989) が認めた山体崩壊構造の北縁に相当する。

2. プレー火山頂上から見た Blanche 谷。1902-05 年及び 1929-32 年の火砕流は Blanche 谷を流れ、一部は Seche 川を流れた。

仏領西インド諸島のマルチニーク島にあるプレー火山は多分 10 万年以上前に活動を始めた。活動の初期は穏やかであったが、その後は爆発的になり、軽石噴火とプレー式噴火（溶岩円頂丘形成と熱雲発生）が交互に起きるようになった。25,000 年前及びそれ以前には、大量のスコリア流を噴出させるセント・ビンセント式噴火も起きた。この時期か、それ以前には、火山体の南西斜面が部分的に崩壊し、崩壊カルデラとして今でもその地形が残っている。(H. Traineau, G. Boudon and J.-L. Bourdier)



3. 溶岩円頂丘の崩壊により大きな岩塊を運んだ有史の粗粒火砕流堆積物。頂上から 4.5 km の Blanche 谷下流部の露頭で、堆積物の厚さは数 m-10 m。写真の途中には厚さ約 1 m の細粒物質からなる基底層が認められる。

